

死者118名の大惨事

—大阪ビル火災—

5月13日夜、大阪・ミナミの繁華街、千日デパートから出火した火事は、約9時間も燃え続け、犠牲者118人というわが国のビル火災史上最大の惨事になった。三階から出火した火の手は一瞬のうちに屋上まで吹きぬけ、千日デパートは炎と黒煙に包み込まれた。最上階のアルサロ「プレイタウン」では閉店まぎわで、多くの客やホステスが踊っていた。そこへ煙と火が吹き込み逃げ場を失った人たちが次々と窓から飛び降り、地面に、屋根にたたきつけられて死んでいった。15日早朝、大阪府警の捜査本部は完全鎮火を待たず現場検証を始めたが、7階のアルサロで折り重なって死んでいる96人の遺体を発見、ほとんどの死者が有毒ガスと煙にまかれて窒息死し、高層ビル火災の煙の恐ろしさと、避難対策のむずかしさを、まざまざとみせつけた。

沖 縄 還 る

5月15日、午前零時、サイレンと汽笛が一斉に鳴りひびいて沖縄は祖国日本に復帰した。第2次世界大戦最時の激戦地沖縄。日本の敗戦と同時にアメリカのアジアにおける重要な戦略基地となり、27年間の長い異民族統治をうけた沖縄。「ただ耐えることだけが、沖縄の宿命でした」と屋良琉球政府首席は語る。アメリカ兵の暴行事件、ひき逃げ、B52爆撃機墜落事故、毒ガス移送、核撤去問題、その度に屋良主席は、最終命令権を持つ高等弁務官府参りを繰り返した。しかし、つねに絶望的な回答しか得られなかった。沖縄100万住民は歯をくいしばって耐え、*復帰の戦い、は続けられた。そして15日、沖縄は島だらけになって復帰した。「沖縄は本日、祖国に復帰いたしました。わたくしは、まずこのことを、過ぐる大戦において尊い犠牲となられた幾百万のみ霊に、謹んでご報告いたしたいと思います。……」東京の武道館で開かれた沖縄復帰記念式典で佐藤内閣総理大臣は、声をつまらせて語った。沖縄復帰に政治生命を賭けた佐藤総理大臣。しかし、沖縄100万同胞にとって真の願いは、核も基地もない沖縄の全面返還であった。日本に復帰した今なお、沖縄本島の12%の面積にあたる88ヶ所の米軍基地がある。ヴェトナム情勢が再度緊迫を増した今、沖縄住民の不安感はぬぐいされない。復帰不安はまだある。ドル経済から円経済に切り換えられたが、物価は1ドル360円に換算されて正札がつけられるのに対し、銀行などでの交換レートは55円低い305円になるからだ。復帰前日の14日、食糧の買いだめをする主婦やサラリーマンは口ぐちに訴える。「はっきり言って不満ですね。基地は残る、自衛隊は来る。おまけに交換レートはさがり物価は上がる。私たちの望んでいた復帰の夢はこんなものじゃない。これからもしんぼうして黙々と働く以外にないですね」今、本土から大資本の攻勢は続き、日本政府の沖縄経済にたいする対策も示されないなかで、長い戦いの末に、ようやく日本に復帰した沖縄100万県民はこれからも生活を守る長い戦いの道を強いられている。